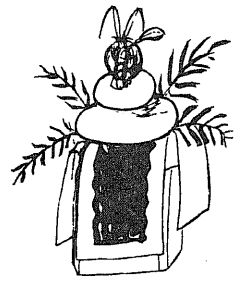

新年二題

松の屋主人

(一)昆布

お鏡餅の上にもコンブ、お七五三飾にもコンブ、お雑煮の中にも、お煮しめの中にも。なんこお正月はコンブづくめではありませんか。コンブ！　コンブ！　よろこんぶ！　コンブが、お正月に幅をきかすのも亦所以あるかなです。

が、しかしコンブが目出たい時に用ひられるのは、よろこんぶの意味ではなく、長くて廣いからだこ云ふ事です。長く生きたい、廣い地面に大きな家を建てゝなごゝ、人間こ云ふものは、どこまでも景氣のいゝ事を考へて樂しんで居るものですね。さてコンブは一たいどの位の長さになるのでせうか、長くてやつこ三メートル、幅は、ざつこ三十センチ、まづ木綿の兵古帶こ云つた調子。もつこもコンブの中でも長いのになるこ、三メートルは愚か、三十メートルに近いものがあるこ云ひますが、それにしても揚子江の流れ、ゴビの沙漠にくらべれば、何こちつぽけな事ではありませんか。

しかしですね。何こ云つても海藻の中で一番大きくて長いのはやはり昆布科植物で、此の科の中には普通のコンブではありませんが、長さが百五十メートルにも達する種類があります。百五十メートル！、メートル法の嫌ひな人には五百尺

五百尺と云へば八十三間で、ざつと一町半、こんなのが大西洋の荒波にもまれ〳〵て居る所はさぞ壯觀な事でせう。私ごもの珍重するコンブが、せめて此の位もあつたら、お正月に用ひる價値が少しはあるなと思ひますが、皆樣如何でせう。それからこの海藻の幅がごの位であつたか、つい聞き洩らしましたが、もしも前にあげたマコンブと同じ割合のものであるとすれば五十尺ですから、大凡十五メートルと云つたわけで、これならば私ごもの家の樣なちつぽけな家だと、雜作なくくる〳〵と卷いて、コブ卷をつくることが出來ますね。お家のコブマキ？　こいつをむしや〳〵と食ふ人間が現はれたら、さぞ痛快な事でせう。

君が代は蝦夷の千島のはてまでも
洩れぬ惠みのひろめ刈るなり　（網代弘訓）

昔は昆布のことをヒロメと云ひ、蝦夷ヶ島卽ち北海道地方では盛に刈り取つたもので、古くから朝廷に獻上して居たものです。それで昆布のことを一名エビスメとも云ひました。エビスメ、ヒロメ、アラメ、ワカメなど幅廣の海藻に共通のメの字のついて居るのも亦興味あるではありませんか。

（二）エビ

エビの事を蝦と書きます。魚にしては少々風變りだから、蟲の仲間に入れたのでせうが、最も普通には海老と書きます。しかしあんな活潑なエビを「海中の御老體」とはちと輕蔑した名前ではありませんか。況んやです、彼が生きて居る間は、決して腰を屈めたまゝのそり〳〵として居る樣な事はありません。何時も腰を伸ばして居て、たま〳〵敵が來ると、腰をすばやく屈伸してはねて逃げますが、その時はいつ腰を屈めたか、又いつ伸ばしたか、とても敏捷で分りません。唯伸ばす筋肉よりも屈める筋肉の方が遙かに强いことは、死んだエビの腰が悉く屈つて居るので、よく分ります。お正月の

しめかざりにエビを使うのは、腰の曲るまで長いきしたいと云ふ念願からでありませうが、折角お目出たい新年を迎へながら死んだエビの眞似なんか、餘り氣のきいたわざとも思はれませんね。

しめかざりにエビを用ひはじめてから、何年位たつて居るか知りませんが、何れにしても長い間新年を迎へる度に日本國中の人がいくらエビを使つても、腰の曲る人は次第に少くなつて、當世では殆んど見當らなくなりました。道理で、近頃のしめかざりにくつつけてあるイセエビを見ると、大抵腰を伸ばして居る樣です。

イセエビは食用にするエビの中では一番大きい種類です。岩の間に棲んで居て、甲羅は堅く棘が生えて居り、色は黑茶色で如何にも丈夫相に見えます。さうして長い〳〵おひげを頭の先からピンとつつ立つて居るその姿は、誠に勇ましくて、まるで古武士の樣で、腰の曲つたヨボ〳〵の老人とは全く比べものになりません。だから私はこの意味で以てエビを使ふことにしたいと思ひます。

イセエビは日本海方面には居りません。又寒い地方の海にも居なくて、福島縣から南の太平洋の沿岸に居ります。

昔から燒野の雉子夜の鶴と云つて母性愛の强い標本とされて居りますが、イセエビも亦母性愛の强い動物と云へませう。彼は自分の產んだ卵を腹肢(腹部に附いて居る四對の篦の形をした足)で、しつかりと抱いて保護して居ります。さうして絕えず新らしい水を送つて居りますが、その中に卵がかへつて子供が游ぎ出すのです。皆さんの中にはエビの子供は鳥の雛と同樣たゞ親の形を小さくしたもの位にお考の方があるかも知れませんが、實際は餘程變つた形をして居ます。それが數回皮を脫いで初めて親エビになるのであります。